

まき網漁業の概要

境漁港は浮魚水揚量が全国的に見ても多く、その大部分が「まき網漁業」によるものです。漁船の大きさ（トン数）により「大中型まき網」と「中型まき網」に分けられ、主に鳥取・島根の大中型と島根（隠岐）の中型が水揚げをしています。夏のマグロのシーズンには、石川県、長崎県、愛媛県、宮城県等の船団も加わり、より一層にぎやかになります。

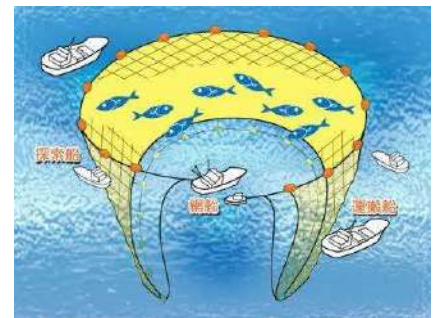
【魚種】 マアジ、マサバ、いわし類、ブリ、クロマグロ等

【漁場】 隠岐・浜田周辺：マアジ、マサバ、いわし類など
日本海中西部：ブリ、クロマグロ

【隻数】 境港に水揚げする主な船団数

大中型：4船団 中型：8船団

※マグロの時期は船団数も増加します。



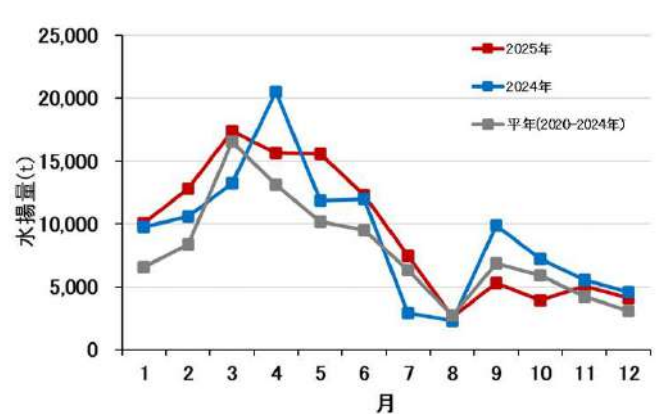
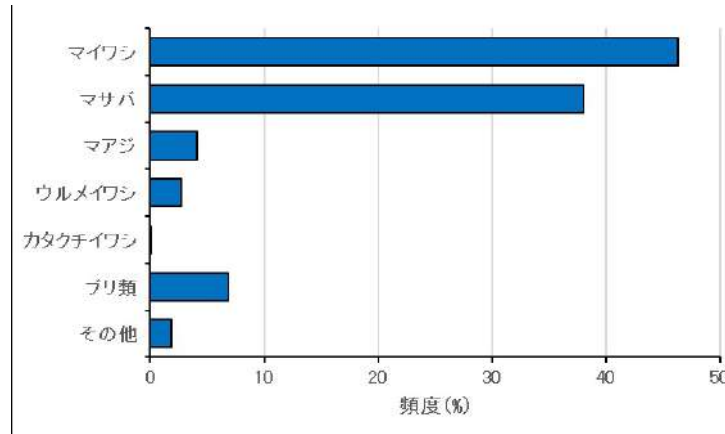
【漁法】 「まき網漁業」は長方形の大型の網を円形状に張って行き、魚群を取り囲む漁法で、船型の異なる複数の船が船団を組んで操業を行います。大中型まき網の場合は、一般に網船1隻、探索船2隻、運搬船2隻の合計5隻で1船団が構成されています。

水揚の状況

2025年の境港におけるまき網漁業全体の水揚量は112,240トンでした（前年比:102%（前年110,323トン）。魚種別にはマイワシ（47%）が最も多く、次いでマサバ（37%）、マアジ（7%）、ブリ（5%）の順となっていました。月別では8～10月を除く各月で平年値を上回る水揚げがあり、2014年以降で最も多くなりました。

境港のまき網水揚割合

月別水揚量の比較



現状の課題と解決に向けた試み

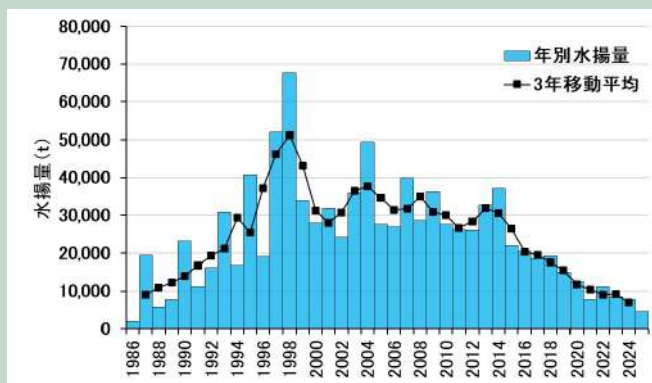
マアジの水揚量と新規加入量調査について

2025年の境漁港におけるマアジ水揚量は4,623トンとなり、前年比59%、過去5年の平均水揚量と比較すると48%となり、過去と比較し低水準で推移しました。境漁港では、2014年（36,712トン）以降、長期的な水揚量の減少が継続しています。

日本海側～九州にかけて各地の漁況を見てみると、2025年において北陸～日本海西部では境港以外でも浜田や富山で低調な水揚量となりました。一方、九州各地や韓国の状況を見てみると、概ね前年・平年並み程度で推移していました。これらの海域で水揚げされるマアジは対馬暖流系群（1つの集団）として資源評価が実施されていますが、漁獲動向が各地で異なっています。この違いの要因について探っていくことが、今後の課題と考えています。

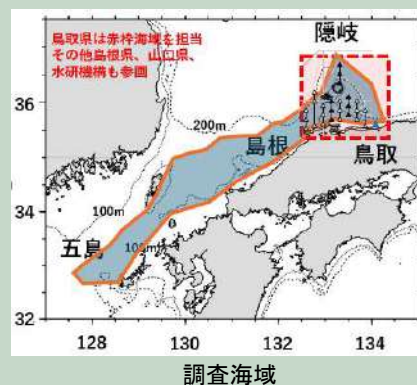


各地の近年におけるマアジの漁獲動向



境漁港のまき網漁業におけるマアジ水揚量

鳥取県水産試験場では6ページに記載の通り、関係機関と共同（水研、山口県、島根県）で当歳魚の分布状況を定量的に把握する「マアジ新規加入量調査」を2003年から実施しており、調査結果は資源評価における加入量の算出に組み込まれています。近年の調査結果の動向については2021年を除きあまり多くのマアジが加入したとは言いつらい年が数年継続しています。このような状況が続くと複数の年級群で豊度が少ない状況となり、全体としてマアジの水揚げが低調になる可能性があります。今後も調査手法や調査範囲の改善に努め、資源評価等の精度向上に寄与していただけるように、調査を継続していきたいと思えます。



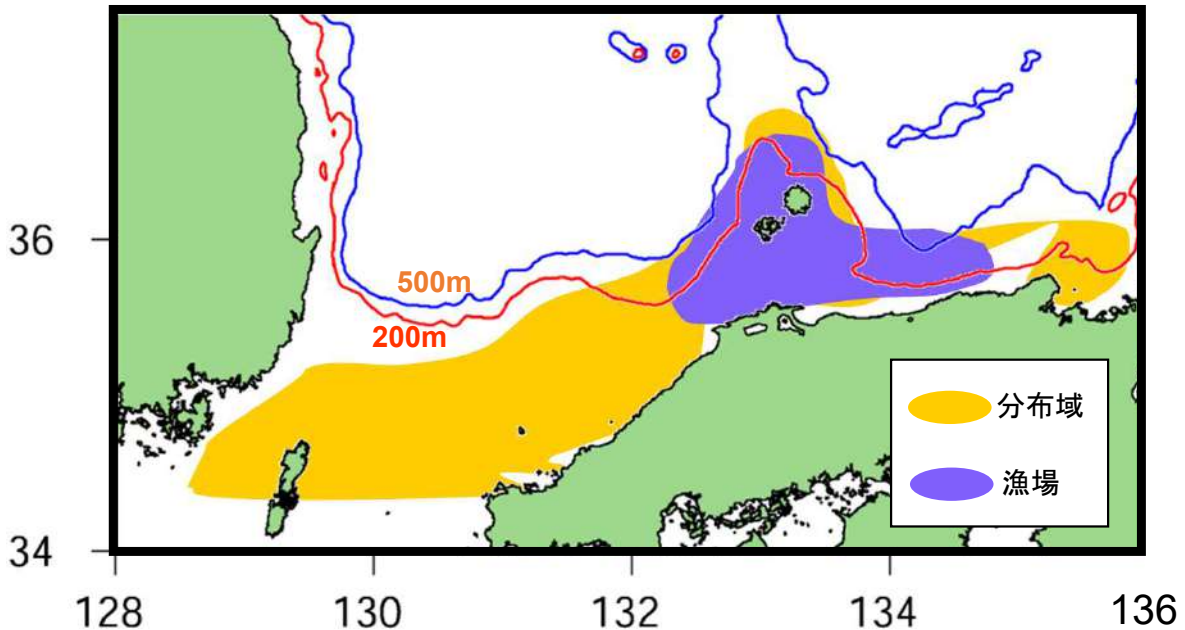
境漁港で水揚げされるまき網1ヶ網あたりの1歳魚漁獲尾数と加入量指標値の年変化



マアジ (市場名 ヒ)

生態

【分布】 南シナ海～北海道まで各地。日本海側では長崎県、島根県の漁獲が多い。群れで生活することが多く、沿岸から沖合の主に浅所を遊泳する。昼は海底近くにいるが、夜になると海の表面近くまで上がってくる。

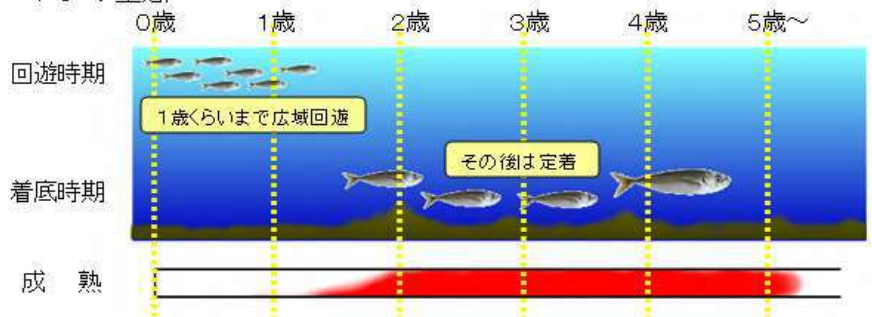


【成長】 通常、寿命は5歳前後と考えられている。最大で尾叉長50cm程度まで成長する。

【成熟と産卵】 早いもので1年、概ね2～3年で成熟する。西日本の産卵期は1～6月。通常、南ほど早く、盛期は3～5月。東シナ海、九州沿岸、日本海沿岸で直径約1mmの卵を産む。

【食性】 しらすなどの小魚や小型甲殻類などを摂餌。

マアジの生態



漁業の特徴

【漁法】 鳥取県では主に大中型まき網により漁獲される。沿岸域では定置網、刺網による漁獲が多い。

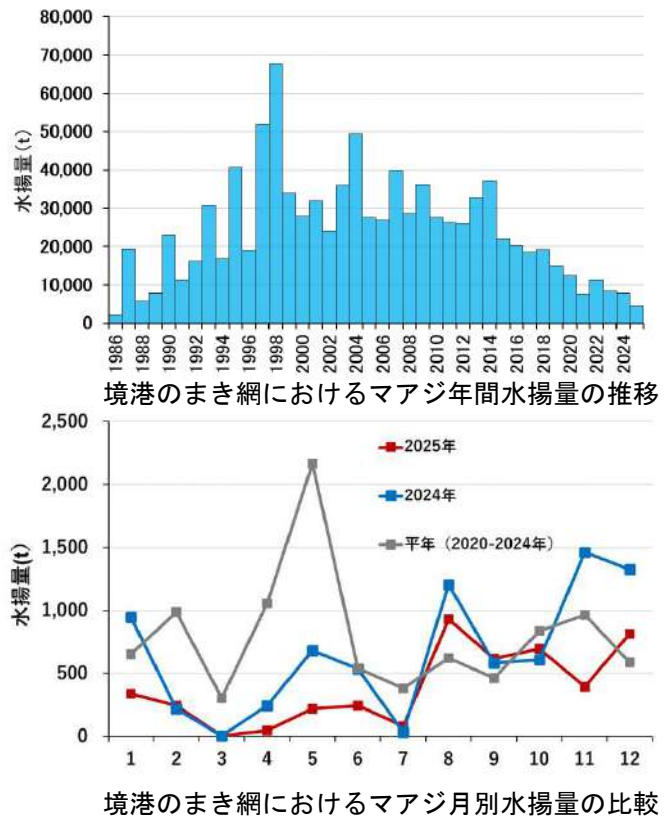
【漁期】 周年漁獲される。鳥取県周辺では初夏のころに脂がのる。

漁獲状況 低位・減少



2025年の年間の水揚量は4,623トンでした。2015年以降、長期的に減少傾向が継続しており、2025年は低水準であった前年をさらに下回りました。月別に見てみると、平年の盛漁期となっている初夏の水揚量が前年に引き続き、低調に推移しました。一方、8月以降は11月を除き各月平年並みから上回る水準で推移しており、近年は過去と比較し、漁獲動向が変化してきている状況があります。

水揚げがまとまった8月以降の体長組成は尾叉長18cm～20cmにかけての1歳魚が主体となっていました。



マアジ以外のあじ類の資源評価にも参画しています（令和4年度から）

境港で「あじ」と言えばマアジ (*Trachurus japonicus*)を指しますが、実はよく観察してみるとマアジ以外のあじ類が混ざっていることがあります。代表的なものに境港ではあおあじと呼ばれるマルアジ (*Decapterus Maruadsi*)、まれにモロ (*Decapterus macrosoma*)などを見かけます。

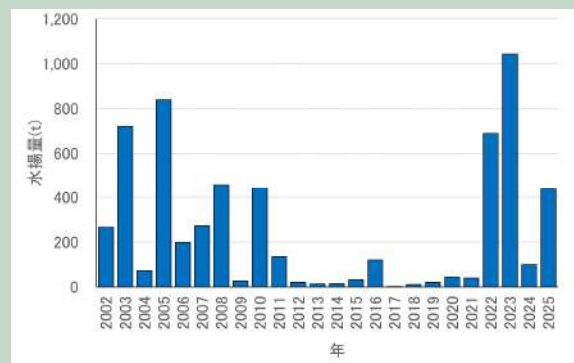
これらの魚種はムロアジ属に分類され、南方性で資源評価は西海ブロック（九州エリア）で行われていましたが、記録を遡ってみると境港において少なくとも2002年から水揚げが確認されています。年によって水揚量の増減が激しく、2025年のムロアジ属の水揚量は437トンとなり、比較的高い水準となりました。月別では大中型まき網において2月だけで年間の半分以上の水揚げがありました。

このような状況もあり、マルアジに関しては令和4年度から資源評価機関として参画しており、魚体測定・サンプリングを継続しています。

今後も調査を継続し、資源評価精度の向上に寄与していきたいと思えます。



上からモロ・マルアジ・マアジ



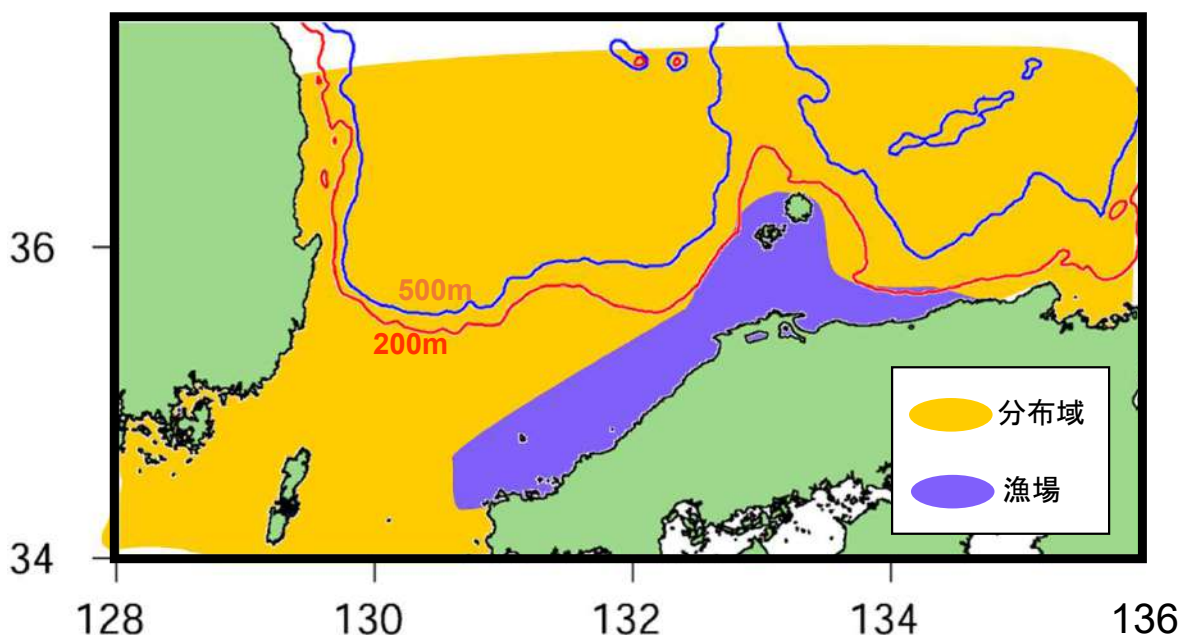
マサバ (市場名 メ)



生態

【分布】 日本周辺の沿岸から沖合域。

日本海側の系群は夏季に索餌のため北上し、秋季から冬季に産卵・越冬のため南下するとされる。



【成長】 寿命は6歳前後と考えられ、最大で尾叉長50cm程度まで大きくなる。

【成熟】 成熟年齢は1歳で半数、3歳で完全に成熟する。春季に東シナ海から日本海西部の沿岸域で産卵する。

【食性】 カタクチイワシ等の魚類やオキアミ、アミ、カイアシなどの甲殻類を摂餌。

漁業の特徴

【漁法】 鳥取県では大中型まき網、一本釣り、定置網、刺網により漁獲される。水揚量のほとんどはまき網による。

【漁期】 まき網では、秋から冬に多く漁獲され、刺網では春に漁獲される。

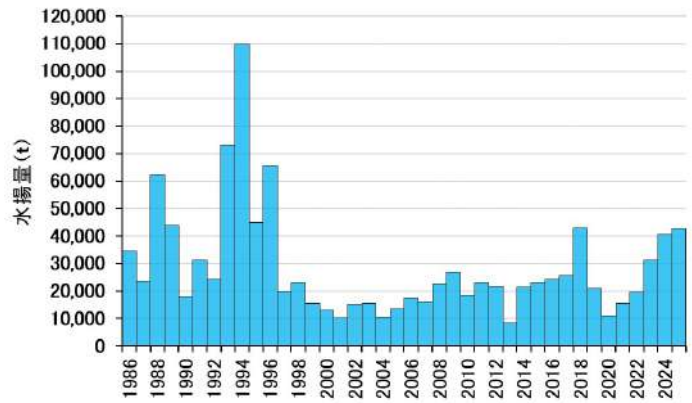
漁獲状況

高位・増加

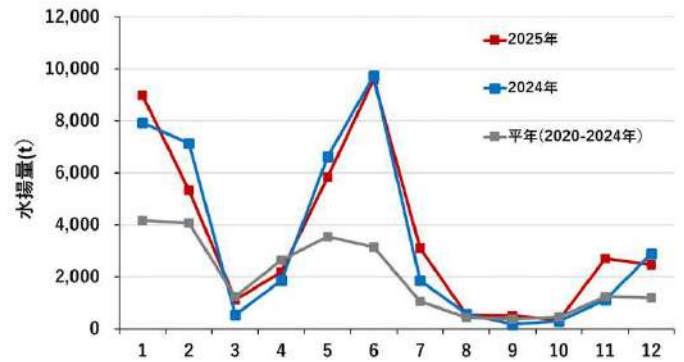


2025年の水揚量は42,717トンで、前年比105%、平年比181%となりました。年別の傾向を見てみると、2021年以降、水揚げ量が回復傾向にあり、2025年は近年の好漁年である2018年（42,845トン）と同等の数量となりました。また、昨年に引き続きの春季に好漁となり、冬季（1～2月）にも平年を上回る水揚げがありました。2022年以降、春季の好漁が継続しています。

体長組成は1～2歳魚を中心に0歳魚に相当する個体の水揚げがありました。2月以降の1歳魚については、近年の中では小型個体が中心となっていました。



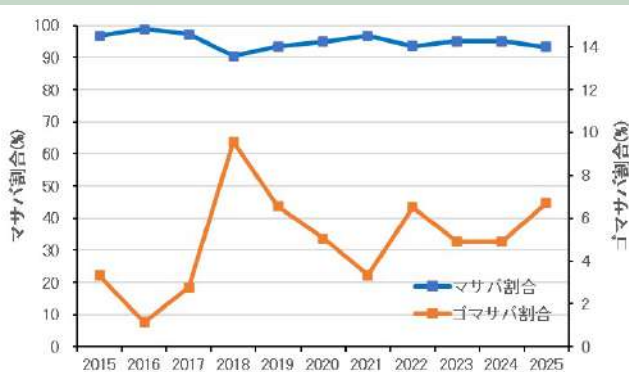
境港のまき網におけるマサバ年間水揚量の推移



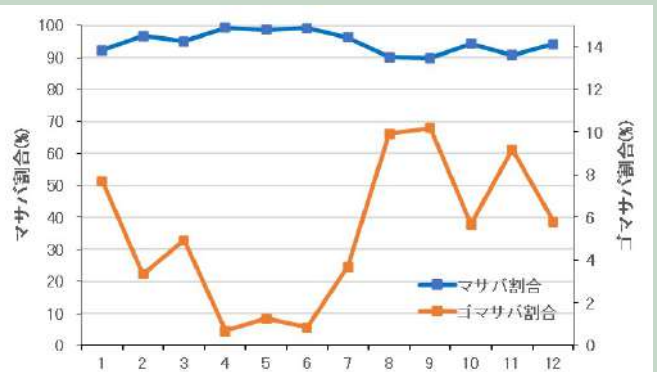
境港のまき網におけるマサバ月別水揚量の比較

近年の境港におけるゴマサバ漁獲状況

さば類にはマサバとゴマサバがおり、ゴマサバは比較的暖かい海域で多い種です。水産試験場では、2015年より測定したさば類からマサバとゴマサバの種判別を行っており、8年分のデータが蓄積されていますので、そこから求めた年別・月別の漁獲割合をご紹介します。まず年別に見ると、判別開始当初の2015年以降、年による増減はありますが、ゴマサバの割合は徐々に増加してきている状況があります。例えば最も多かった2018年ではおよそ10%であり、2018年はさば類の水揚げが特に多かった年なので、水揚量で換算するとゴマサバだけで4千トン超の水揚げがあったこととなります（2025年のゴマサバの割合は6.7%で水揚量に換算すると約2,873トン）。また月別に見ると、夏から冬に比較的多い傾向があることもわかってきました。こうしたデータの蓄積・解析によって、今後も資源評価の高精度化に積極的に関わっていければと思います。



年別さば類水揚割合



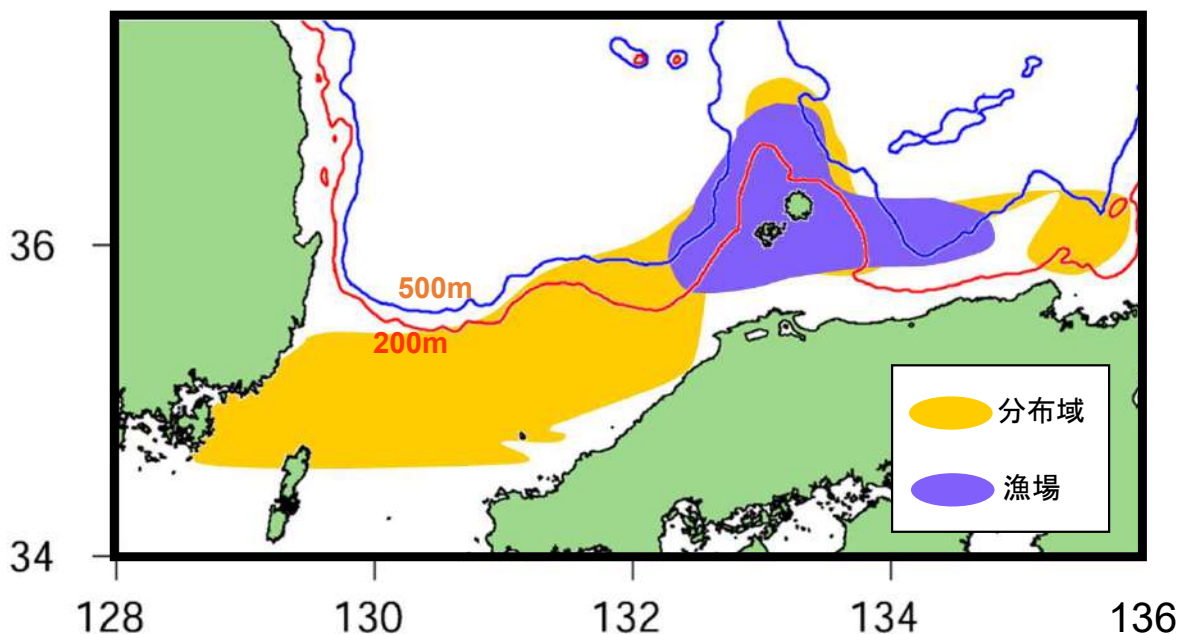
月別ゴマサバ水揚割合(2015～25年)

カタクチイワシ (市場名タレ)



生態

【分布】 日本周辺の沿岸域。



【成長】 寿命は3歳と考えられ、最大で体長15cmくらいまで大きくなる。

【成熟】 満1歳で成熟し春季～秋季にかけて、東シナ海から日本海各地の沿岸域で産卵すると考えられている。

【食性】 カイアシ類などの動物プランクトンを主に摂餌。

漁業の特徴

【漁法】 成魚は主に隠岐諸島のまき網により漁獲され、境港に水揚げされる。一方、しらす（稚魚）や幼魚は船曳網、すくい網などにより主に美保湾周辺の沿岸域で漁獲されている。

【漁期】 周年水揚げされるが、春と秋に多く水揚げされる。春に水揚される個体のほとんどが体長の大きな産卵親魚である。

漁獲状況

低位・減少

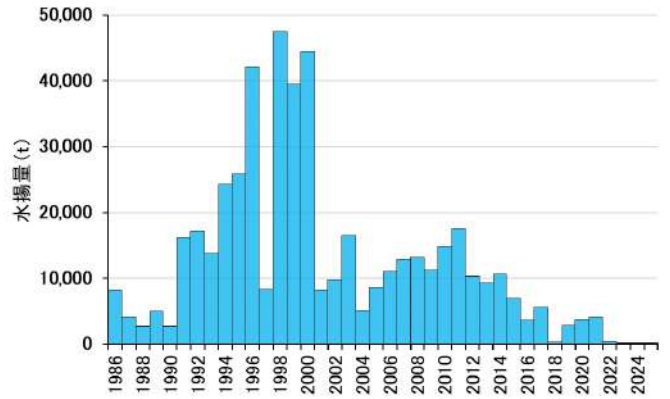


水揚量は2012年以降減少傾向にあります。資源評価結果における2024年の資源状態は、過去の「低水準」と言われる時期と比較しても極端に低いと推定されています。2025年の境港の水揚量は、わずか32トンと相当低い水準になりました。

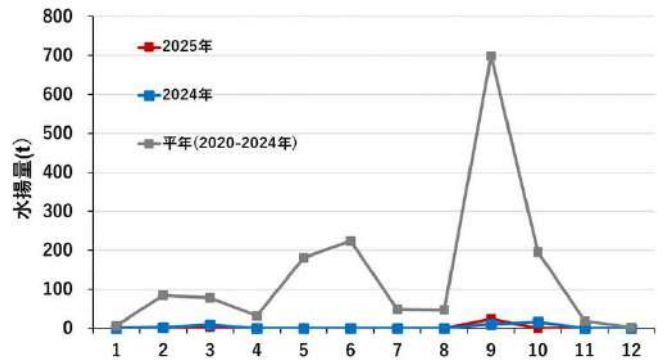
月別で見ても、例年、比較的水揚げの多い5～6月や9月の水揚量が少なく、2025年はまとまった量の水揚げが確認される月がありませんでした。

一方、境港のまき網漁業においては、近年、マイワシやマサバなどの他魚種を狙うことでカタクチイワシの漁獲圧が低くなってきています。

なお、2024年から本種に加え、ウルメイワシにおいてステップアップ方式でのTAC管理が継続されています。



境港のまき網におけるカタクチイワシ年間水揚量の推移

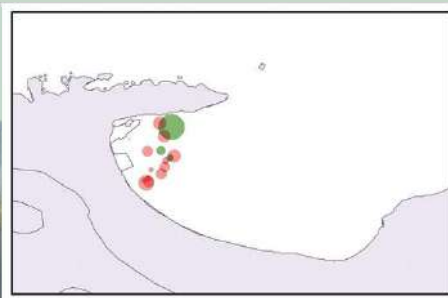


境港のまき網におけるカタクチイワシ月別水揚量の比較

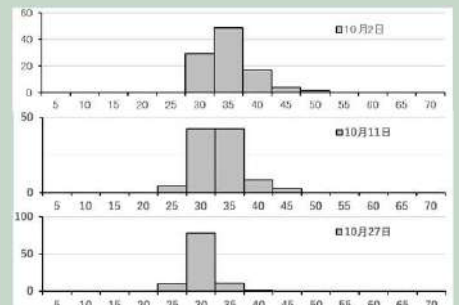
美保湾におけるカタクチイワシの調査

カタクチイワシは沖合だけでなく沿岸においても重要な魚種です。特に県西部に位置する美保湾においては、古くからすくい網や船曳網で盛んに水揚げされています。

しかし、その水揚量は増減が激しく、持続的・安定的な漁獲を続けるために資源動態の把握が求められており、当試験場は平成30年度から美保湾のカタクチイワシ調査を継続して行っています。調査では船曳網、すくい網漁業者の方々に標本船野帳の記入やサンプル提供等にご協力いただきながら、体長組成の把握や漁場の移り変わりなど、新たなことが少しずつわかってきました。今後もデータを蓄積し、引き続き資源動態の把握等の検討を進めていきたいと思ひます。これからも調査への御理解・御協力をよろしくお願いいたします。



しらす (主にカタクチイワシの子) 標本船調査による漁場図



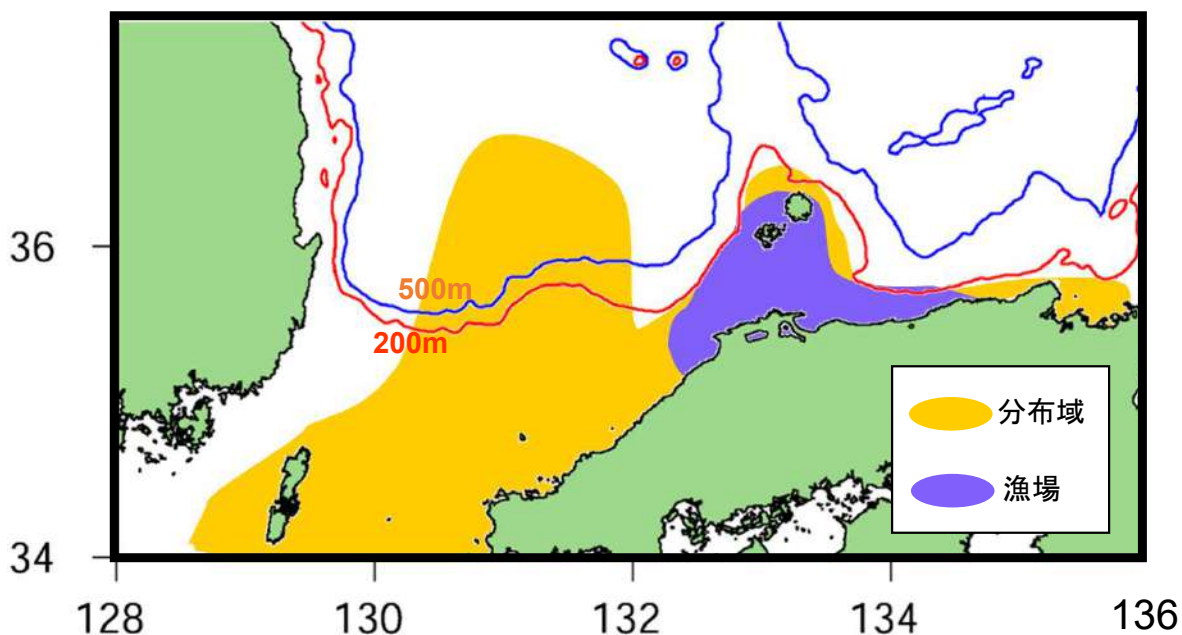
2024年カタクチイワシ体長組成

マイワシ (市場名 ツ)



生態

【分布】 数十年周期で資源水準が大きく変動し、それによって分布範囲が異なる。低水準期には日本各地の沿岸域。高水準期には日本近海を中心に東シナ海、オホーツク海などにも広がる。索餌や産卵に伴う南北の大規模な回遊も見られる。



【成長】 寿命は通常7歳前後で、体長25cmくらいまで大きくなる。まれに30cmまで成長。

【成熟】 1～2歳で成熟する。春季に東シナ海から日本海の沿岸域で産卵する。

【食性】 カイアシ類や珪藻類などのプランクトンを摂餌。

漁業の特徴

【漁法】 鳥取県では、主に隠岐諸島のまき網により漁獲されたものが、境港へ水揚げされる。

【漁期】 まき網では、春に成魚が、秋に当歳魚が多く漁獲される。

(※通常加入期において)

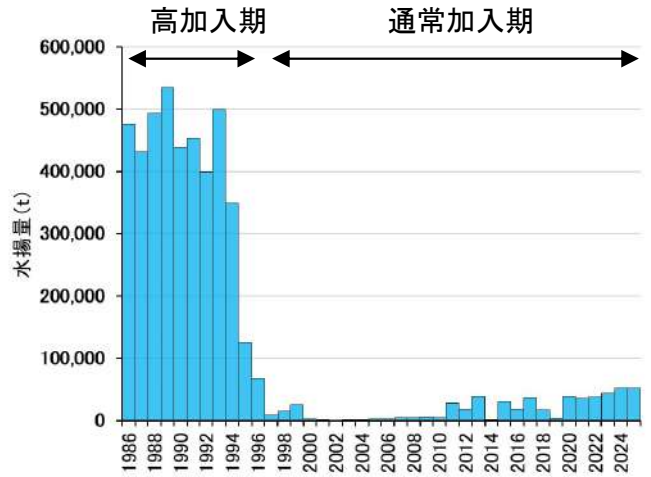
漁獲状況

高位・増加

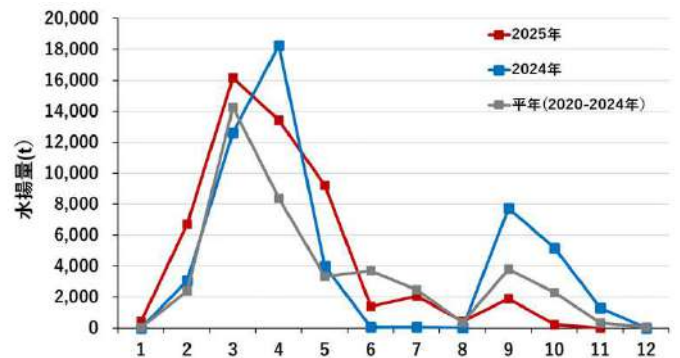


1990年代後半から資源が少なくなったマイワシ資源ですが、2011年に3万トン近い水揚げを記録し、以降は概ね増加傾向にあります。2025年の水揚量は51,952トンで前年並み、2011年以降では比較的高い水準となりました。月別では、2～5月にかけて各月平年並み～上回り春季に好調な水揚げが続きました。

一方でマイワシは、2014年の965トン、2019年の3,771トンのように水揚量が大きく減少する年もあり、水揚量の増減が激しい魚種として知られています。水揚量の変化に惑わされることなく、資源動向を正確に把握するために、モニタリングの精度を高めていく必要があると考えています。



境港のまき網におけるマイワシ年間水揚量の推移



境港のまき網におけるマイワシ月別水揚量の比較

マイワシ稚仔魚調査の取り組み

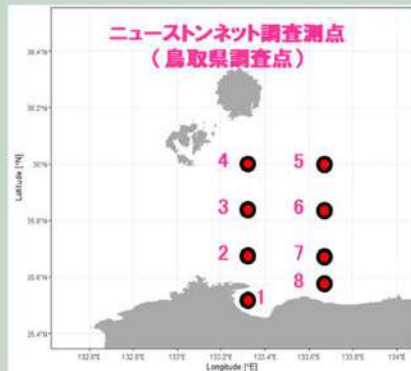
マイワシは海洋環境の変動により、資源量が大きく増減することが知られています。水産試験場では2012年からマイワシの産卵期である春季に稚仔魚調査を実施し資源量との関係などを把握する試みを行っています。※水産研究・教育機構、島根県と連携し実施

また、採集されたサンプルは仔魚期の成長や食性に関する研究にも活用されています。これまでの調査においては、例年4月に採集尾数のピークをむかえる年が多く、近年では増減は激しいものの1,000尾数以上のまとまった採集が見られる年が複数確認されています。

今後もこのような新規加入量調査を継続し、加入動向の把握に努めていきます。



ニューストンネット
(網口幅1.3m、海面を曳網)



	3月	4月	5月	3か月合計
2012	0	73	31	104
2013	0	27,030	9	27,039
2014	0	2	4	6
2015	5	3	3	11
2016	184	10	1	195
2017	7	96	23	126
2018	0	8,702	204	8,906
2019	23	170	0	193
2020	156	64	63	283
2021	19	1,275	5	1,299
2022	41	1,528	83	1,652
2023	68	90	6	164
2024	67	1,141	未実施	1,208
2025	31	1,352	未実施	1,383

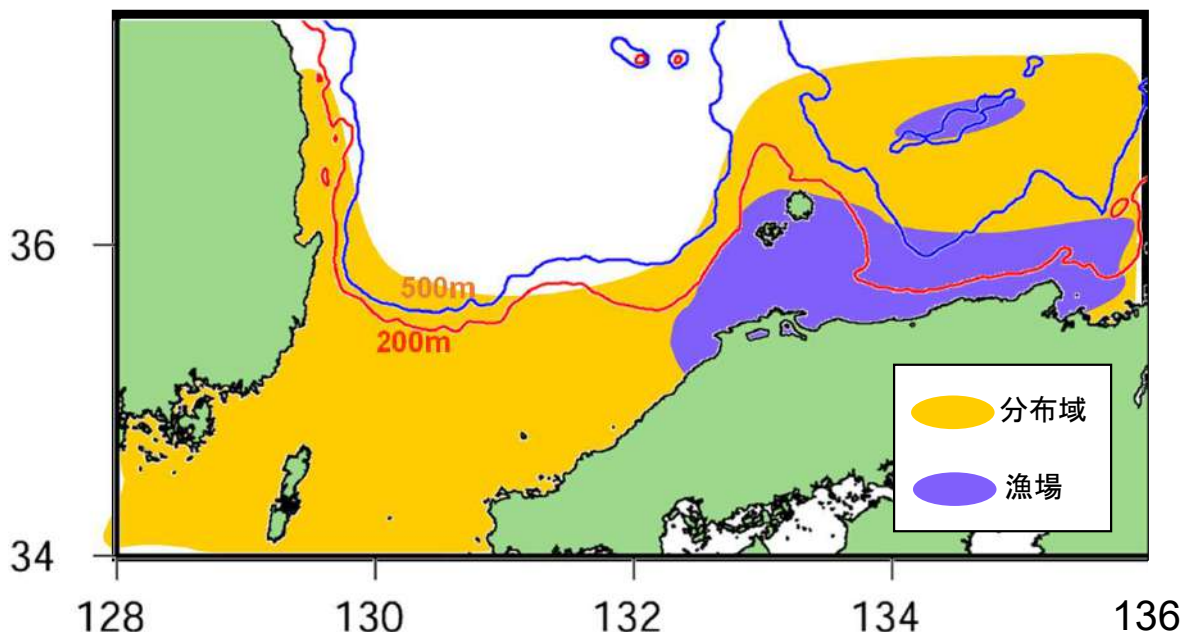
年別マイワシ稚仔魚採集尾数



ブリ (地方名 (出世魚) つばす→はまち→まるご→ぶり)

生態

【分布】 日本周辺の沿岸から沖合域（よく似たヒラマサは全世界の温帯・亜熱帯に分布）



【成長】 寿命は7歳前後で、大きなものは尾叉長115cm、20kg以上に成長する。

成長は早く、1歳で40cm（1kg）、3歳で70cm（4.5kg）程度まで大きくなる。

【成熟】 概ね3歳で成熟する。産卵場所は東シナ海の大陸棚縁辺部が中心と考えられている。産卵期間は長く1～6月まで続く。

【食性】 稚魚は初期にはカイアシ類などの動物プランクトンを摂餌し、3cm程度に成長すると魚類を食べ始める。13cm以上になると、カタクチイワシ、スルメイカなどの魚介類を主体とするようになる。

漁業の特徴

【漁法】 鳥取県では、主に沖合の大中型まき網により漁獲される。沿岸においても刺網、定置網、一本釣により利用されており重要な魚種となっている。

【漁期】 まき網では、12～翌1月に多く漁獲される。沿岸ではやや小型（5kg未満）のものが周年漁獲される。

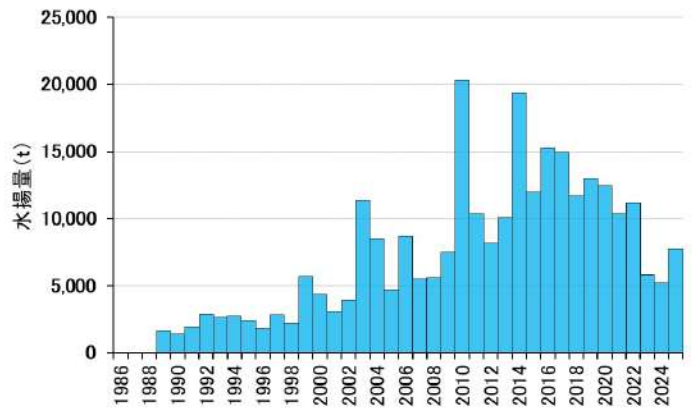
漁獲状況

低位・減少

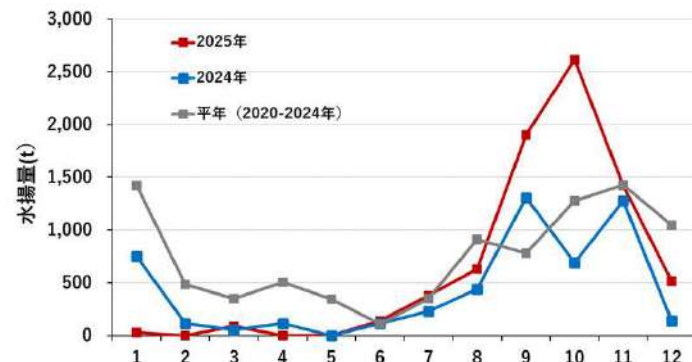


2000年代以降、水揚量は増加傾向が続いていましたが、2023年に急減しました。2025年の水揚量は7,727トンとなり、前年は上回ったものの平年をやや下回る水準となりました。月別では例年、単価の上昇する12月にかけて水揚量が増加しますが、2025年は9～10月にかけて、各月で前年・平年を上回る水準の水揚げがありました。当該月の銘柄については、ワラサに加え、つばすやヒデリゴといった小型銘柄の漁獲も確認されました。なお、例年は多くの水揚げが確認される1月と12月については前年同様、低調に推移しました。

令和7年度におけるブリの資源評価において親魚量はMSYを実現する水準を下回っています。今後も資源動向を注視していき、モニタリングを継続する必要があると考えています。



境港のまき網におけるブリ類年間水揚量の推移

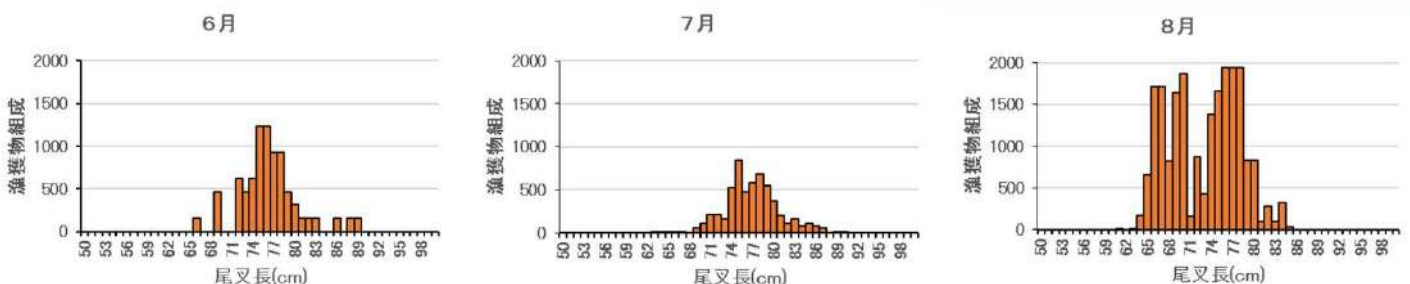


境港のまき網におけるブリ類月別水揚量の比較

令和4年度からブリの市場調査を継続しています

ブリは上述の通り、令和3年度から新ルールでの資源評価が開始され、令和7年度からはステップアップ方式による試行的なTAC管理が実施されています。

水産試験場では、令和4年度よりブリ類の市場調査・魚体測定などの基礎的な調査を実施しており、漁場の聞き取りをはじめ、下図のように月別銘柄別の体長組成の把握に努めています。今後も調査を継続し、資源評価の精度向上や適切な資源管理に寄与していきたいと考えています。



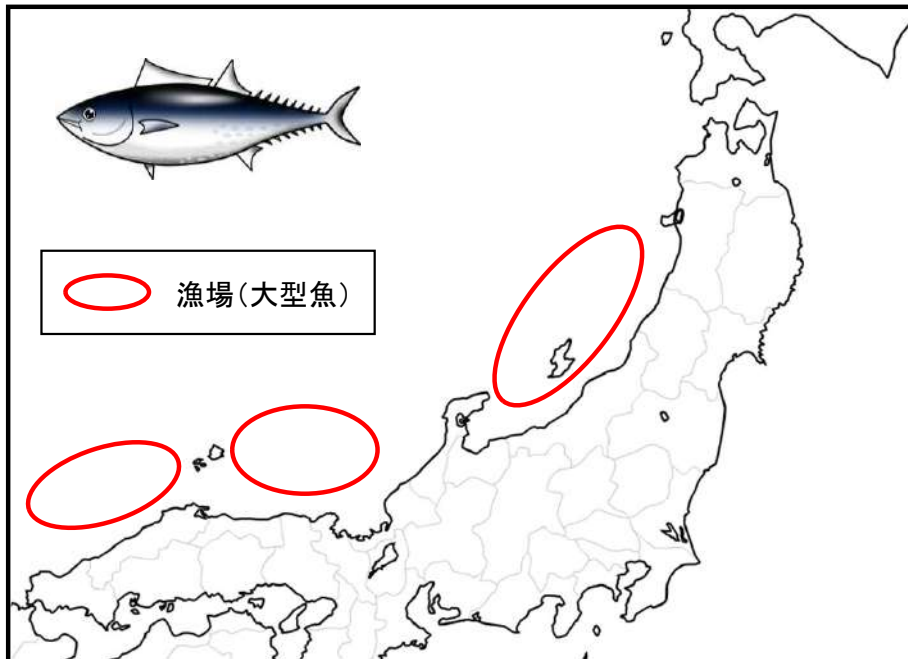
体長測定データから算出したまき網漁業におけるはまち・まるご・ぶり銘柄の漁獲物組成

クロマグロ (地方名 まぐろ、本まぐろ)



生態

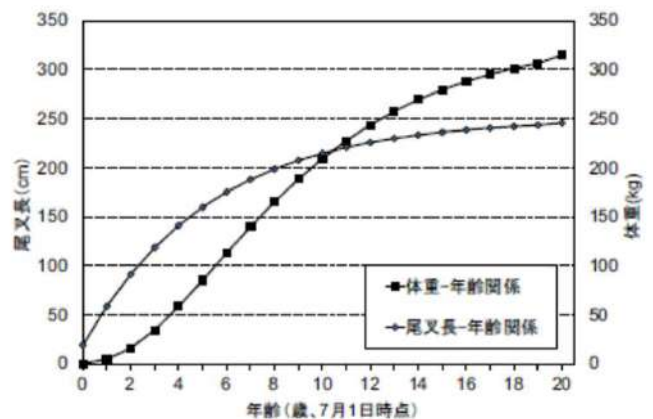
【分布】 日本周辺をはじめ、太平洋の温帯域に広く分布する。



【成長】 寿命は20歳以上と言われ、最大のもので体長が3m、体重400kg近くまで成長する。

【成熟】 体長1mを超える3歳頃から成熟が始まり、日本南方～フィリピン沖では4～7月に産卵し、日本海では6～8月に産卵する。

【食性】 日本海では、スルメイカやカタクチイワシなどの小型浮魚類を食べていることが多い。



太平洋クロマグロの尾叉長・体重と年齢との関係 (令和5年国際漁業資源の状況 水産庁・水産研究・教育機構より)

漁業の特徴

【漁法】 大中型まき網で漁獲され境港に水揚げされる。

【漁獲量・漁期】 TAC (漁獲可能量) 管理魚種であり、漁獲上限が決められている。大中型まき網による日本海区の大型魚 (30kg以上の成魚) は、2022年から漁業法に基づくIQ管理 (漁獲割り当て) となり、各船団に漁獲量が配分されている。

大型魚の漁獲可能量 (IQ管理) : 2,084トン (参考: 2024年 1,871トン)
管理期間: 5月1日～7月25日

漁獲状況 中位・やや増加

・2025年の境港におけるクロマグロの水揚量は大型魚（30kg以上の成魚）が1,131トン（前年1,071トン）、小型魚（30kg未満の未成魚）のヨコワが1.8トン（前年2.2トン）でした。

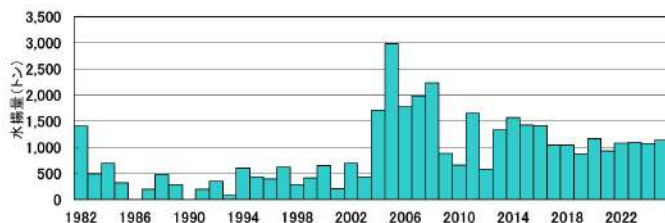
・5～7月に漁獲された大型魚の組成は、尾叉長（体長）122cm（推定3歳）、163cm及び185cmにモードが確認されました。

・境港の近年の水揚量は自主規制やTACにより一定水準で推移しています。※資源が低位にあった太平洋クロマグロは、2014年の中西部太平洋まぐろ類委員会（WCPFC）の決定により国際的な保存管理措置が講じられています。

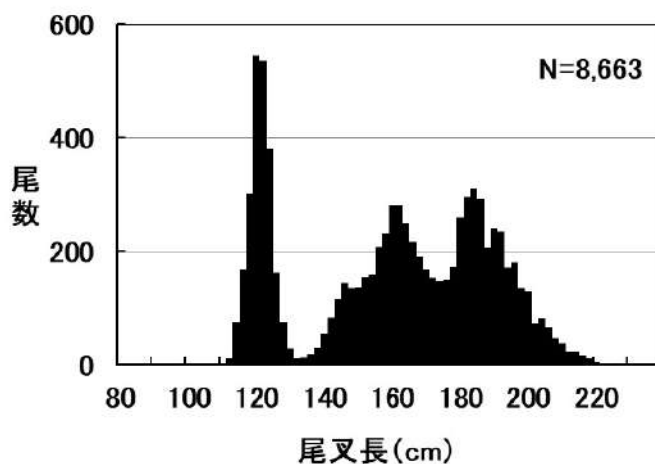
※小型魚の漁獲量を2002～2004年平均水準から半減。大型魚の漁獲量を2002～2004年平均水準から増加させない

・この関係者による資源管理の取組により、太平洋クロマグロ資源は順調に回復。2022年の親魚資源量は約14.4万トンまで回復し、暫定回復目標（約4万トン）は5年早い2019年に達成しました。また、次期回復目標（約13万トン）を2021年に達成したことからWCPFCは漁獲枠の増枠を決定し、令和7年漁期から漁獲上限が小型魚で10%、大型魚で50%増加しました。

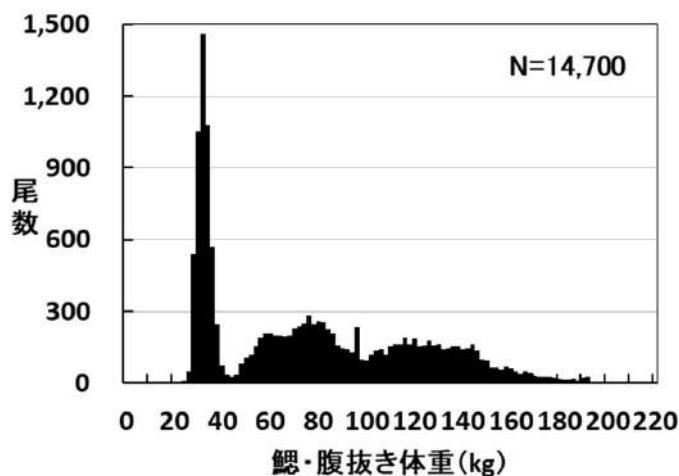
・2026年の境港の水揚げの見通しですが、資源の回復を受け、引き続き漁獲枠上限近くまで水揚げされ、サイズは50kg前後の中型と80kg以上の大型魚が中心となる見込みです。



境港のまき網におけるクロマグロ水揚量の推移（大型魚）



尾叉長(体長)組成(2025年大型魚)



体重組成(2025年大型魚)

資源を大切に使うための調査や取り組み

水産試験場では、市場へ水揚げされたクロマグロの体長測定や産卵状況を確認するための卵巣組織採集を行うとともに、平成22年度より、国や他県と共同で仔魚調査（ネット曳きによる生まれて間もない仔魚採集）を行い、生残過程等を調べています。



クロマグロの仔魚
(H22年7月
試験船第一鳥取丸で採集)



市場での体長測定

いか釣り漁業の概要

夜間に集魚灯に集まったいかを自動いか釣り機により擬餌針で釣り上げます。

沿岸で日帰り操業する10トン未満漁船と、いかの回遊にあわせ日本海各地で操業する19トン型漁船があり、本県沿岸域でも夜間に陸から海を眺めると操業するいか釣り漁船の灯り（漁り火）で幻想的な光景が見られます。

【魚種】 スルメイカ、ケンサキイカ（白いか）

【漁場】 10トン未満漁船→鳥取県沿岸

19トン型漁船（小型いか釣り漁船）

→東シナ海及び日本海全域



現状の課題と解決に向けた取り組み

いか釣り漁業は、大きな集魚灯を利用して操業しているため、他の漁業より燃油を多く必要とし、燃油価格の高騰が漁業経営を圧迫しています。また、近年、漁場が沖合域に形成される傾向にあり、沿岸域に漁場が形成されにくくなっています。

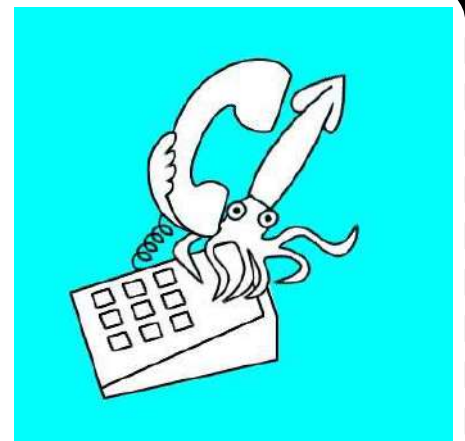
鳥取県では燃油高騰対策として、スルメイカが山陰沖を北上する春と南下する秋～冬に第一鳥取丸を用いてスルメイカの漁場探査調査を実施しています。そして、調査結果を、速やかに漁協にFAX送信することで操業の効率化を図っています。

電話で情報をゲット！！

漁業者に他県の水揚げ状況を知って頂くために、電話応答専用の「白いか（ケンサキイカ）、しまめいか（スルメイカ）漁況案内」を行っています。白いかは、長崎県及び兵庫県の水揚げ状況をお知らせしています。しまめいかは、境漁港の水揚げ状況をお知らせしています。

電話番号

0859-45-4505

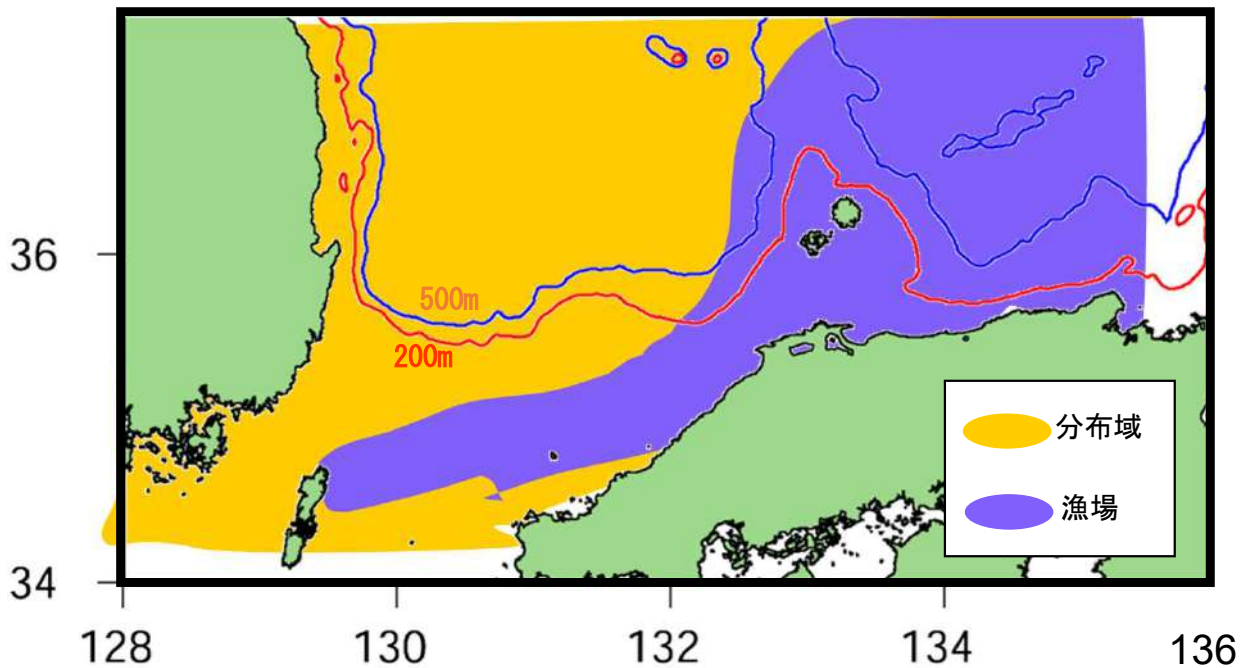


スルメイカ（地方名 しまめいか）



生態

【分布】 日本周辺に広く分布しており、主に日本海側には秋生まれ群が太平洋側には冬生まれ群が来遊している。



【成長】 寿命は約1年で、大きいもので外套背長約30cmまで成長する。

【成熟】 雄は約9カ月、雌は約11カ月で成熟する。

系群	産卵期	産卵場	主漁期
秋季発生系群	前年10～12月	北陸沿岸～東シナ海	3～12月
冬季発生系群	前々年12～前年3月	主に東シナ海	1～2月

【食性】 動物プランクトンや、キュウリエソ等を食べる。

漁業の特徴

【漁法】 主にイカ釣りにより漁獲される。

【漁期】 日本海では1～3月上旬は前年の冬に生まれ、主産卵場へと南下回遊するスルメイカ（冬季発生系群）が主に漁獲される。また、3月中旬以降は前年の秋頃に生まれ、日本海沿岸部を北上、10月以降に主産卵場へと南下回遊するスルメイカ（秋季発生系群）が漁獲される。

3 漁獲状況

鳥取県船（10トン未満漁船、19トン型漁船）のスルメイカの漁獲量は290トン（前年比63%）で漁獲金額は2.8億円（前年比56%）となりました。

また、2025年の境港における水揚量は32トン（前年比16%、平年比14%）と前年と平年を大きく下回り、集計開始（1990年）以降、最低値を記録しました。月別の水揚量では近年主漁期となる1～2月は低調に推移したものの、3月に前年を上回り、平年並みの水揚げがありました。

境港の水揚量は2002年まで高い水準で推移していましたが、年々減少傾向にあり、ピーク時の1/10以下となっています。

近年のスルメイカ漁の低調傾向は日本海地区全体で認められ、資源量の減少や回遊経路が漁獲好調期から変化したことなどが原因だと考えられます。また、産卵時期の変化を示唆する研究報告もあり、今後、来遊時期や魚体のサイズが変化する可能性があります。

秋生まれ群



漁獲状況
低位・減少

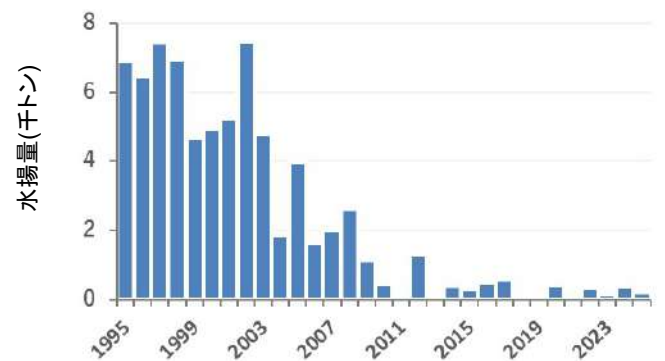
冬生まれ群



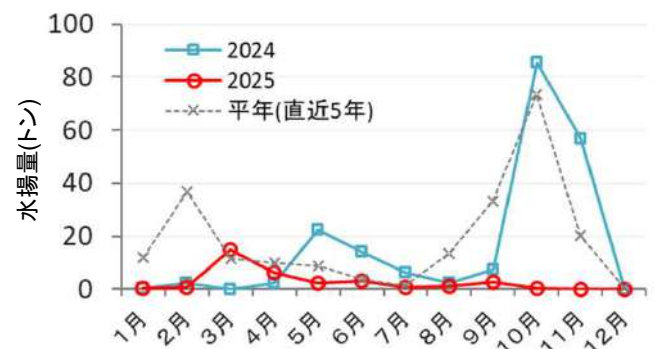
漁獲状況
低位・減少



鳥取県における漁獲量・金額の推移



境港における年間水揚量の推移



境港における月別水揚量の比較

4 資源を大切に使うための調査や取り組み

いか釣り漁業は、スルメイカ資源量の減少に加え、昨今の燃油高騰や、海洋環境の変化による来遊時期等の変化、漁船隻数の減少による漁場探査力の低下等により、非常に厳しい状況にあります。

鳥取県では燃油高騰対策として、スルメイカが山陰沖に来遊する春と秋に、第一鳥取丸を用いたスルメイカの漁場探査調査を実施しています。釣獲したスルメイカから、分布密度や大きさを調査し、結果を、速やかに漁協にFAX送信することで操業の効率化を図っています。



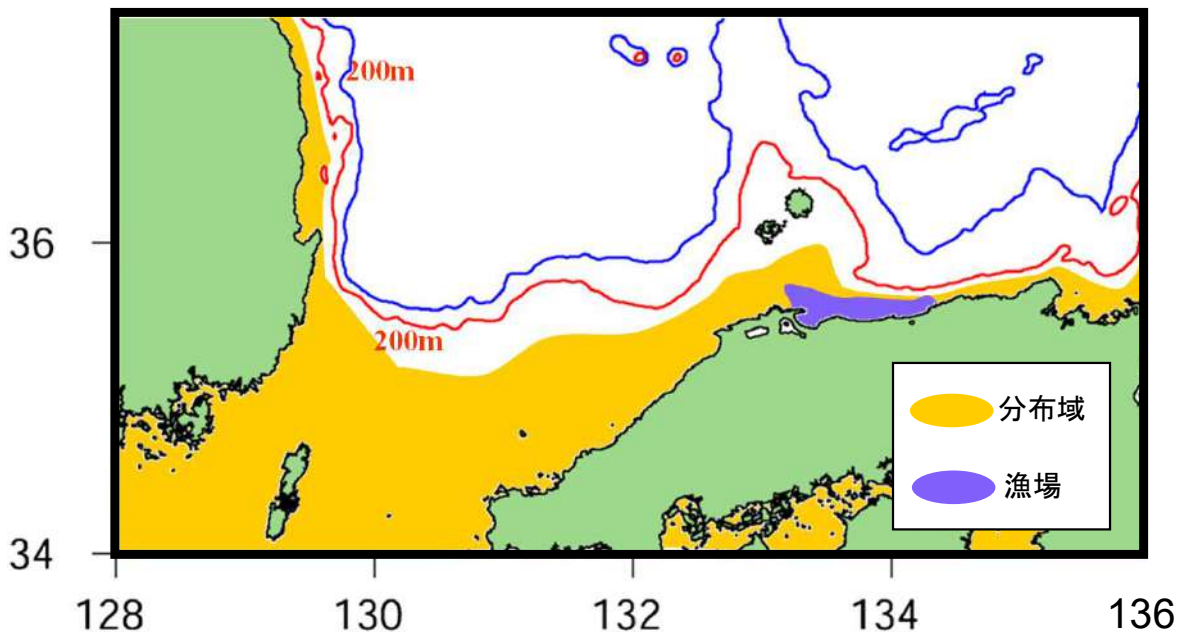
漁場探査調査中の測定風景

ケンサキイカ・ブドウイカ (地方名 白いか)



生態

【分布】 青森県以南の本邦沿岸、韓国、東海、南海に分布している。



【成長】 寿命は約1年で、雌の最大外套背長は41cm、雄は50cmまで成長する。

【成熟】 外套背長7～8cm（月齢約5カ月）程度から成熟個体が出現し、外套背長20cm前後（月齢約8カ月）でほぼ半数が成熟する。

【食性】 小型の魚類、甲殻類、軟体類を食べる。

漁業の特徴

【漁法】 秋までは主に手釣り、それ以降いか釣（機械釣）により漁獲される。

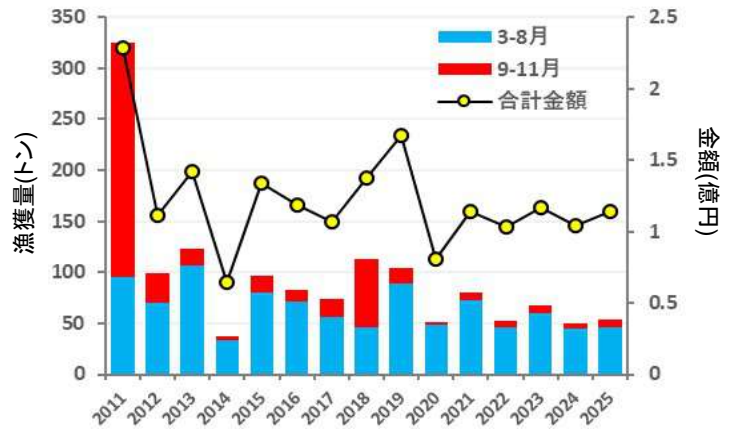
【漁期】 4月、または5月から漁獲が開始され、初期には沿岸寄りの水深20～40m付近に漁場が形成され、月を追って次第に沖合へと漁場が移り、秋には水深80～100mの海域が主漁場となる。

3 漁獲状況

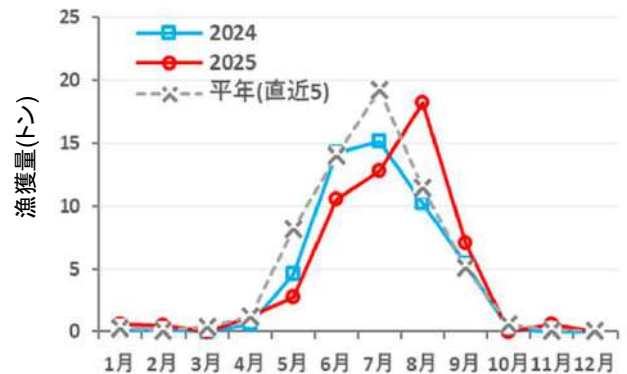
2025年の3月～12月における鳥取県船（10トン未満漁船）のケンサキイカの漁獲量は54.5トン（前年比107%）、漁獲金額は1.1億円（前年比110%）となり、漁獲量、漁獲金額ともに前年を上回りました。

2025年における漁獲の主体となったのは、主に夏季に漁獲されるケンサキイカで、3～8月の合計漁獲量は平年（直近5年）比83%でした。8月下旬以降に漁獲されるブドウイカ（ケンサキイカの季節型）は、近年来遊量が少ないと考えられ、9～11月の合計漁獲量は平年比133%を示しましたが、低調でした。

ブドウイカの不漁は、2020年から継続的に認められており2025年もブドウイカの資源状態が減少傾向にあると考えられます。



鳥取県における漁獲量・金額の推移



鳥取県における月別漁獲量の比較

4 資源を大切に使うための調査や取り組み

ケンサキイカ（白いか）は沿岸漁業の生産金額の上位に入る重要魚種ですが、近年、その漁獲量は低調に推移しています。これまで水産試験場、栽培漁業センターと共同で、白いかの付加価値向上を目的に、活いか出荷の技術開発、普及等を行ってきました。しかし、2014年の不漁を機に、県内の活いかを扱う飲食店は、山口県からの購入ルートを構築し、県産活いかの需要が低下しました。

そこで、いか後進県の鳥取県を売り込み、新たな付加価値向上を図るため、新たな出荷方法によるブランド化を目指して、漁業者の協力のもと、いかの墨袋を除去する技術開発を行いました。2016年には、墨袋除去技術のマニュアル化と講習会等での技術指導を行い、技術普及を図るとともに、試験販売を行い、単価向上効果を確認しました。この結果から、ブランド化に資すると判断されたため、2017年から鳥取墨なし白イカ『白輝姫（しらきひめ）』の名称で販売が行われています。

さらに、この墨袋除去技術を生かし、仲買などから要望の大きいコウイカなどの墨止めの技術開発・普及に取り組んでいます。

